

コロナダルの地域概念

— ミンダナオ島の一地名に関する考察 —

梅原弘光

はじめに

コロナダル (Koronadal) という地名がフィリピン全国に知れわたるようになるのは、一九三九年以降のことである。同年設立の国家開発入植庁 (National Land Settlement Administration) による最初の本格的入植事業が、ミンダナオ島南部のコロナダル・バレーで実施されたからである。^①以後半世紀余りの間にルソン島やビサヤ諸島から大量の移住者が流入し、そこが南コタバト州のいわば心臓部を構成するまでに成長した。コロナダルといえ、かつての政府開発入植地であり現在では、南コタバト州の州都として、フィリピンでは広く知られる地名となった。

ところが、コロナダルという地名には、ある種の違和感、不安定さがつきまとうのを禁じ得ない。なぜそうしたことが起こるのであろうか。以下では、コロナダルという地名

の地域概念について考察してみよう。これが本稿の課題である。

一、地名につきまとう違和感

まず最初に、コロナダルという地名にまつわる違和感とは何か、という点を確認しておかなければならないであろう。この地名が指し示すのは、ミンダナオ島南部の南コタバト州の一行政町 (Municipality)、北緯六度二分から六度三四分、東経一二四度四七分から一二四度五八分にかけて横たわるコロナダル町である。^②フィリピンでは一般に行政町の中心街区はポブラシオン (Poblacion) もしくはその町名で呼ばれる。しかし、コロナダルでは、中心街区はポブラシオンと呼ばれることがあっても、コロナダルと呼ばれることは少ない。ダバオ、コタバトなど他地域から南コタバト州州都のコロナダルに向かうあらゆる乗り物の行き

コロナダルの地域概念（梅原）

先は、「マルベル (Marbel)」であって「コロナダル」ではない。なぜなら、中心街区にはマルベルという固有の地名があるからである。これは、一般のフィリピンの町での経験と著しく異なる点である。

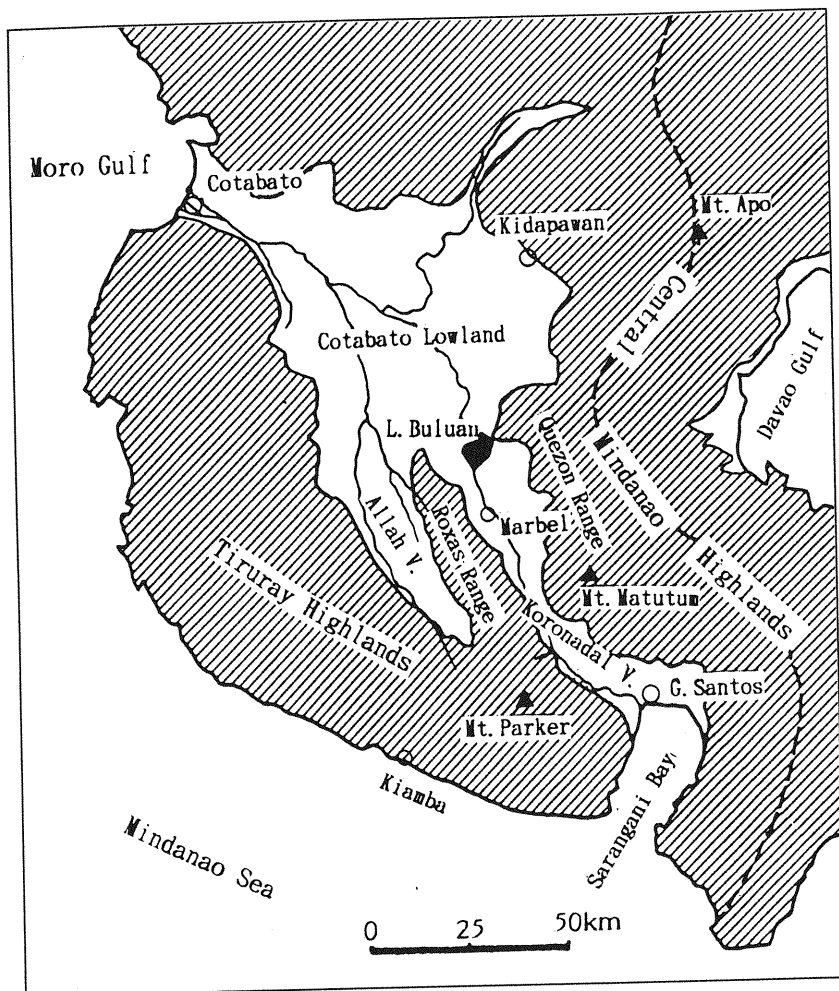
フィリピンで利用可能な五万分の一の地形図は国家地図資源情報片 (NAMRIA) 発行のものであるが、その作成の基になっているのは一九四七〜五三年の空中写真から編集された合衆国軍地図シリーズ (US Army Map Series) である。この地形図上でコロナダルの地名を搜すと、混乱は一段と深まる。なぜなら、コロナダル町が含まれる二枚の地形図に、コロナダルという地名はどこにも見当たらないからである。コロナダル町北部が含まれる図幅の図名はマリ (Mamali) であり、中部から南部にかけての主要部分が含まれる図幅でも、図名には州都のコロナダルではなく、その西隣の町名のバガ (Banga) が採用されている。町内を流れる二本の主要河川名も、マルベル川とタプラン (Tapi'an) 川であってコロナダル川ではない。

では、コロナダルの地名は地形図に全く載っていないかというところではない。図名バガの南隣りはポロノリン (Polonling) であるが、その図幅の中にコロナダルの地名が出てくる。そこは、コロナダル町の南東約三五キロの地点で、行政的にはコロナダルの南のトゥピ (Tupi) 町を過

ぎてその先のポロモロック (Polomolok) 町の一角にあたる。しかもこの地名には、村落名であるにも拘わらず、通常の村落を示す活字より一ポイント上の、町名に用いられるものと同じ大きさのものが使われている。何かを示しているように思われるが、その意図が必ずしも明確ではない。

また、コロナダルの地理的範囲についても出典により異なる場合が多い。例えば、『フィリピン歴史事典』では、コロナダルの地名は南コタバト州の項目の中に現れ、州都コロナダルは、以前マルベルと呼ばれ、パイナツプル、バナナといった州の主要農産物が栽培される肥沃な谷に位置する、とある。⁽³⁾一九五二年の『コタバト案内』の中で、コロナダル町長室長経験者のG・ガソは、「コロナダルの領域は、北はブルアン湖岸から南はポロノリン村辺りまで、東はダバオとの州境が走る中央ミンダナオ高地から西はキアンパを見下ろす山地までで、この間に肥沃でコゴン草原と湿地が広がるコロナダル谷が横たわる」としている。⁽⁴⁾つまり、コロナダルの範囲をミンダナオ島中央高地からテイルライ山地の間という。これに対して地理学者のK・ペルツァーは、コロナダルを「ケソン山脈とロハス山脈に挟まれ、サランガニ湾からブルアン湖にかけ北西方向に伸びる細長い平原」とする。⁽⁵⁾（第1図参照）。

コロナダルという地名につきまとう違和感とは、こうし



第1図 南西ミンダナオの地勢概略

〔出所：Wernstedt & Spencer, *The Philippine Island World*, Univ. of California Press, 1967, Fig. 78 (p. 543). より加工〕

コロナダルの地域概念（梅原）

た通常とは異なる使われ方、州都という重要な地名にも拘わらず地形図に記載されていないこと、指し示す範囲における不統一の存在などによるものである。

二、語源から見えてくる地域概念

コロナダルという地名の語源としては二説ある。一つは「コゴン草原」説であり、他は「光環」説である。

まず「コゴン草原」説からみていこう。コロナダル一帯に古くから居住していたのはビラアン（Bilaan）と呼ばれる少数民族で、焼畑農耕と狩猟・採集を組み合わせた生活様式をもっていた。一九九〇年にビラアンは南コタバト州に約六万四、〇〇〇人みられるが、うち三分の一がコロナダルの谷合ないし谷沿いの山地部に居住する。ためにこの辺り一帯の地名にはビラアン語起源のものが多く、ビラアン語でkolonもしくはkoronといえ、コゴン草（kugon, *Imperata cylindrica*：和名チガヤ）のこぞ、datalもしくはnadalは「平らな場所、平原」を意味するといわれる。したがって、コロナダルはkolon na datal、つまり「コゴンの生い茂る草原」に由来するということである。コロナダルの町内の最初期の入植者（original settler）に聴いても、入植当時谷すじの両側の山地部は密林に覆われていたが、谷合では河川あるいは小川沿いに大木が茂り、その他の部分

は一面コゴン、タラヒブ（talahib, *Saccharum spontaneum*）、シリボン（silibon, *Themeda triandra*：和名ナンヨウカルカヤ）などの生い茂る草原であったということである。ビラアンが谷合の平坦部を焼畑耕作に使っていたことから、草地化が広範に進んでいたのであろう。そうしたかつての植生景観から、コロナダルの地名が由来したという考えである。

次に「光環」説である。これでは語源をなぜか英語のcoronaに求める。なぜなら、コロナダル谷の地形が東北部、東南部、西南部の三方を三〇〇〜四〇〇mの山並みに丸く囲まれている、小高い場所に登って谷を見下ろすと山並みがある。たかも「光の環」のようにみえるからといわれる。

もっとも、この説にはわかには理解しづらい。なぜならば、コロナダル谷は向斜軸に沿って発達した構造谷、つまり縦谷であって、光環状に見えるところを想像するのが難しいからである。同谷の地理的範囲は、第1図に示したように、ミンダナオ島中央高地南端に連なって北西―南東方向に走るケンソン（Quezon）山脈と、その西部をほぼ平行して走るロハス―マトウラス―パーカー（Roxas-Matulas-Paker）山脈の間で、南のサラングニ湾から北西のブルーアン湖までといわれる。すなわち両山脈の間に横たわる幅平均一二キロ、全長約八〇キロの細長い部分がコロナダル谷で

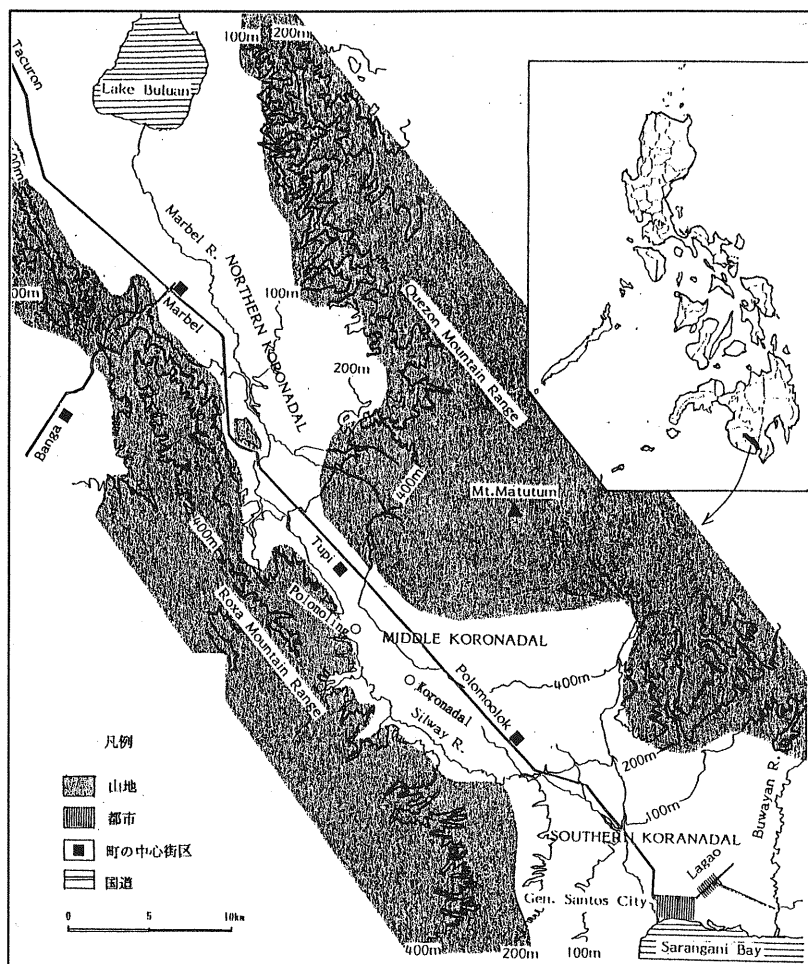
ある。この谷すじを国道に沿ってヘネラル・サントス(General Santos)からマルベルに向かって移動すると、途中ポロモロックとトウピの間でマトウトウム山(Mt. Matutum, 2286m)の西側山麓で海拔高度が四〇〇m余りの地点を越えなければならぬが、その辺りではコロナダル谷といってもそういう感覚を持ちにくい。しかしこの部分も、新生代第四紀更新世まではミンダナオ川河口からサラングニ湾にかけて伸びた浅い海の水道(shallow channel)であった、といわれる¹³⁾。その証拠としては、ピキット要塞(Fort Pikit)やマトウトウム山南麓丘陵で見つかったサンゴ礁、サンゴ質石灰岩が挙げられる。その後この水道がゆつくりと隆起するが、その間にケソン山脈南部の火山活動でマトウトウム山ができ、火山碎屑物が付近を埋めつくして谷すじ中部の高度を大きく引き上げた。つまり、生成的には全体が同じ地殻作用によりできたが、その後の火山活動により谷の一部が埋まり変形したということである。その結果、もともと一本の谷すじが、サラングニ湾に向かって緩やかに傾斜するポロモロック以南の南部コロナダル(海拔二〇〇m未満)、ポロモロックからトウピにかけての山麓傾斜地からなる中部コロナダル(二〇〇m以上五〇〇m)、ブルアン湖に向かって排水する北部コロナダル(海拔二〇〇m未満)の三部分から構成されることになった(第2図参照)。

史苑(第六〇巻一号)

もつとも、こうした地形的差異はそれぞれの地域の氣候に大きく作用して、同じ谷すじでも地域差を鮮明にする。南部のヘネラル・サントス一帯は年間降水量九〇〇mmと全国でもっとも雨の少ない地帯となっている¹⁴⁾。これに対してもっとも降水量の多いのは中部コロナダルで、年間一、五〇〇〜二、〇〇〇mm、北部コロナダルがその中間で一、三〇〇〜一、五〇〇mm程度の降水分布になる。特徴的なことは、いずれの地域も年平均した降雨量があり、作物の栽培にとつて非常に有利な条件を備えている。中部コロナダルから南部コロナダルにかけてドール、その子会社のスタンフィルコなど多国籍農企業の進出が見られるのはそのためである。

この谷すじのもう一つの特徴は、土壌が非常に肥沃な点である。コタバト一帯の詳しい土壌調査は未了であるが、スペンサーとウエンステッドによるとコロナダル、アラール(Allah)、キダパワン(Kidapawan)で行われた特別調査の結果は、「コロナダル谷が極度に優れた土壌基盤をもつことを示している」と述べている¹⁵⁾。石灰岩と火山岩を母材として生成された砂壤土(火山性砂壤土)が基本で、表土は三〇から四〇cmと比較的深く、腐食に富む、ということである。

このようにみてくると、実は、「光環」説が成り立つのは



第2図 コ罗纳ダル・バレーの概略

〔出所：NAMRIA 発行の5万分の1地形図より加工〕

コ罗纳ダル谷の中でも北部コ罗纳ダル、特にマルベル周辺においてであることがわかる。なぜなら、そこだけがケン、ロハス両山脈とマトウトウム山にそれぞれ北東、東南、南西の三方向を囲まれていて、マルベル周辺の高所に上って谷すじを見下ろすと、一見、光環のイメージに合致するからである。

ここでわれわれにとつて重要なのは、いづれの説がコ罗纳ダルの語源として有力と考えられるかではない。そうではなくて、以上の検討から少なくとも、コ罗纳ダルという地域呼称が、ミンダナオ島南部のケン山脈とロハス山脈の間をサランガニ湾からブルアン湖に抜ける構造谷を指すという点を確認できたことである。

三、コ罗纳ダル・バレー入植計画

一九三九年、ダバオの在留日本人増加に脅威を感じていたコモンウェルス（自治）政府は、それへの対抗の意味もあって、急いでここコ罗纳ダル・バレーに政府による開発入植地を開いた。¹⁵ 実施機関の国家開発入植庁は、入植計画対象地に指定された、サランガニ湾からブルアン湖に伸びる全長約八〇km、九万二、二〇〇haの谷すじを、南部のラガオ地区、中部のポロモロック地区とトゥピ地区、北部のマルベル地区の四つに区分し、一九三九年三月のラガオ地

区をかわぎりに、トゥピ、マルベル、そして最後にポロモロックと、一九四〇年一〇月にかけて順次入植者の受け入れを開始した。開設二年後の一九四一年三月には、入植者数は四地区合計で二、四六七人、入植庁職員とその家族を含めて一万三七人がコ罗纳ダル・バレーに入植したことになる（第1表参照）。第二次世界大戦中には日本軍の進駐もあって、入植事業は一時中断を余儀なくされた。戦争終結後事業は再開されるが混乱がひどく、入植庁の入植者受け入れ事業は一九四〇年代末で事実上終わりとなった。一九五〇年に新たに設立された入植開発公社（LasDeco）は、入植庁の残務を引き継いだが、コ罗纳ダル・バレーでの新しい入植地開設に着手することはなかった。

しかし、移住者の流入はその後も途絶えることなく続いた。その結果、谷すじの人口は爆発的に増加した。その模様を市町別、年次別に示したのが第2表である。コ罗纳ダル・バレーが南部、中部、北部の三地域からなることは既に述べたが、それぞれの地域の人口増加と共にその中に幾つもの行政町が新たに制定された。国家開発入植庁の入植事業地区との対応関係では、ラガオ地区がブアヤン町（一九五四年に町名を変更してヘネラル・サントス町、六七年には昇格してヘネラル・サントス市となった）の一部、ポロモロック地区とトゥピ地区はそれぞれ現在の行政町と一

第1表 コロナダル・バレー入植計画と1941年3月31日現在の実績

入植地区	開設年月日	計画面積 (ha)	農場予定地 (ha)	人 数			
				庁職員	家族員	入植者	家族員
Lagao	1939・3・3	30,200	10,200	85	135	582	1,709
Polomolok	1940・10	18,000	13,500	—	—	347	718
Tupi	1939・7・3	23,000	14,000	39	38	582	1,891
Marbel	1940・6・10	21,000	14,500	13	12	956	2,930
合 計		92,200	52,200	137	185	2,467	7,248

コロナダルの地域概念（梅原）

〔出所：K. J. Pelzer, *Pioneer Settlement in the Asiatic Tropics : Studies in Land Utilization and Agricultural Colonization in Southeastern Asia*, American Geographical Society, N. Y. , 1945, pp. 149-151 ; D. G. Romero, *The Koronadal Valley and Preliminary Survey*, (memeographed script kept at Notre Dame Marbel University Library vertical Collection), 1977, p. 8.]

第2表 コロナダル・バレーの市町別人口変化：1939－1990年(単位：人)

地 域 別		1939	1948	1960	1970	1980	1990
市町別(制定年)							
コロナダル・バレー		22,673 —	65,574 (12.52)	165,750 (8.03)	222,392 (2.98)	356,069 (4.82)	543,603 (4.32)
南コロ ナダル	G. Santos City (1947, 1968)	14,115 ^a —	32,019 ^b (9.53)	84,988 ^c (8.47)	85,861 ^d (0.10)	149,396 ^e (5.69)	250,389 (5.30)
中コロ ナダル	Polomolok (1957)	— —	— —	15,536 —	32,570 (7.68)	59,312 (6.18)	89,372 (4.19)
	Tupi (1953)	— —	— —	19,945 —	22,874 (1.38)	31,591 (3.28)	43,232 (3.18)
北コロ ナダル	Koronadal (1947)	8,558 ^f —	33,555 ^g (16.39)	32,437 ^h (−0.00)	54,413 (5.31)	80,566 (4.00)	108,738 (3.04)
	Tampakan (1969)	— —	— —	— —	10,731 —	18,057 (5.34)	25,526 (3.52)
	Tantangan (1961)	— —	— —	12,844 —	15,943 (2.19)	17,147 (0.73)	26,346 (4.39)

注 a. 現在のマルゴン、アラベル町を含む。 b. グラン町が加わる。
 c. グラン町が独立。 d. マルゴン町が独立。 e. アラベル町が独立。
 f. 旧セブ町の人口を除外。 g. コロナダル谷以外の村々の人口を除外。
 h. トゥピ町が独立。なお、人数の下の()内の数値は、年平均成長率(%)。
 〔出所：1990年人口センサスより。〕

第3表 コロナダルにおける言語集団別人口構成 (%) : 1990年

言語集団別	南コタバト州	コロナダル谷	コロナダル町
タガログ	29,082(2.7)	26,011(4.8)	3,678(2.7)
セブアノ	383,142(35.8)	230,209(42.3)	11,918(11.0)
ヒリガイノン	374,755(35.0)	184,326(33.9)	70,365(65.0)
イロカノ	53,801(5.0)	17,075(3.1)	13,796(12.7)
その他	54,589(5.1)	41,941(7.7)	847(0.8)
主要言語小計	895,369(83.6)	499,562(91.9)	100,604(92.9)
マギンダナオ	38,238(3.6)	16,079(3.0)	465(0.4)
ビラアン	64,002(6.0)	22,728(4.2)	3,484(3.2)
ティボリ	50,253(4.7)	603(0.1)	83(-)
その他	16,462(1.5)	4,631(0.8)	3,661(3.5)
少数言語小計	175,767(16.4)	44,041(8.1)	7,693(7.1)
総 計	1,071,136(100.0)	543,603(100.0)	108,297(100.0)

〔出所 : NSO, 1990 *Census of Population and Housing : South Cotabato, Manila, 1992.*〕

致、最後のマルベル地区がコロナダル、タムパカン、タンタガンの三町を含むものであった。同表によると、一九三九年に二万二、六七三人であったコロナダル・バレーの人口は、一九九〇年には五万三、六〇三人へと、五一年間に二四倍という大きな増加をみた。その結果、人口密度も一九三九年の平方キロ当たり約九人から九〇年には二六七人となり、全国平均の二〇二人をはるかに上回るまでになった。現在のコロナダル・バレー住民の言語集団別人口構成をみると、セブアノとヒリガイノンがそれぞれ四二%、三四%と他を圧倒し、タガログ、イロカノなどを合わせた主要言語集団が全体の九二%を占めている(第3表参照)。これに対してビラアン、マギンダナオなど少数言語集団人口は八%でしかない。この谷すじの先住民は、前述のように、一部にマギンダナオもいたが主にビラアンからなり、一九三九年当時の人口のほとんど一〇〇%を彼らが構成していたのである。ところが今日では、それら少数民族が全体の一割弱になったということは、ここ半世紀あまりの期間にセブ島、パナイ島などビサヤ諸島からのキリスト教徒フィリピン人移住者が、先住民を排除して谷すじを占拠したことを物語るものである。

四、行政町としてのコロナダル

コロナダルの地域概念(梅原)

州都コロナダル町は、南コタバト州の北西部に位置し、東部をタムパカン、南部をトウピ、スララ(Surallah)、西部をバガ、北部をタンタガン町とスルタン・クダラート(Sultan Kudarat)州に接する(第3-C図参照)。町全体の面積は二八四・二km²で、州内の一一町のうち第五番目であるが、人口規模では一九九〇年現在一〇万八、七三八人を擁して、当時の州内ではヘネラル・サントス市に次いで二番目に大きい。²⁰⁾

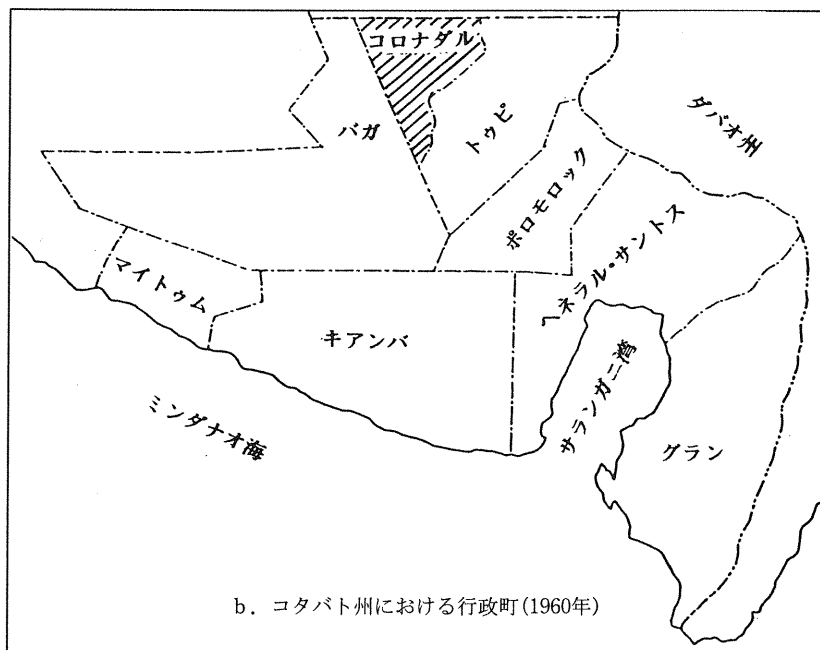
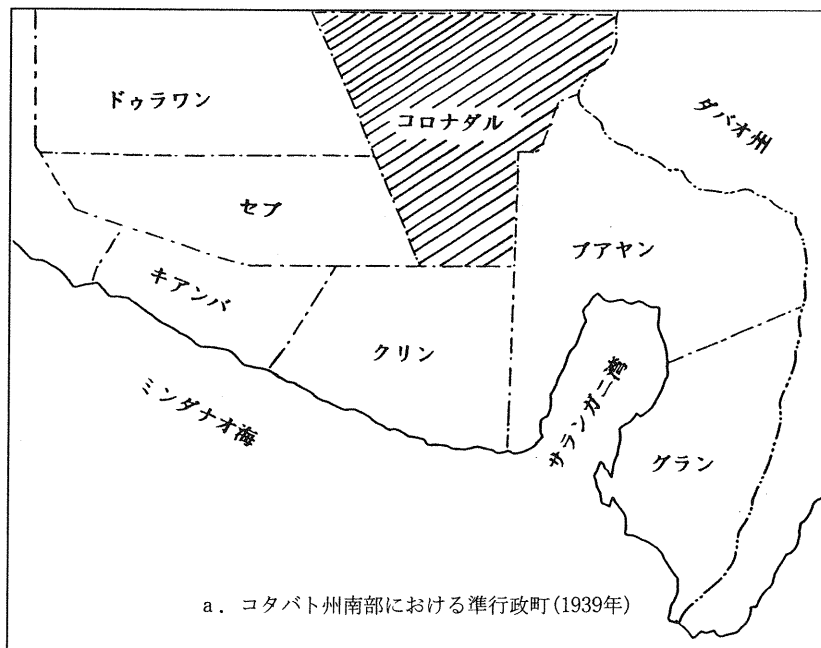
コロナダル町のもたらす違和感の原因は、一つには町域がこれまで幾度か大きく変動したことに由来する。コロナダルが行政町となるのは、一九四七年の八月に出た行政命令八二号によってである。それまでは、同じコロナダル町といってもムニシパル・ディストリクト(Municipal District)、つまり中央政府によって地方自治権限が認められていない行政区(準行政町)であった。²¹⁾しかも、当時の町域の規模は今よりもはるかに大きく、現在のポロモロック西部からトウピ、タムパカン、タンタガン町のすべてと、ティボリ、スララ、バガの一部を含むものであった(第3-a図参照)。そこでは先住民のビラアンやマギンダナオが中央からノミナルに統合されているだけで、基本的には伝統的政治関係のもとで独自の宗教と慣習に基づく社会生活を続けていた。そうした地域に入植庁がビサヤ諸島、ルソン

島からキリスト教徒フィリピン人を移住、入植させるわけであるから、同庁はコロナダル・バレー全域に対して別途行政権限を行使しなければならなかった。具体的には、それぞれの入植地区事務所が地方行政を代行した。

共和国独立後の一九四七年に、コロナダル準行政町は地方自治権限をもった行政町に昇格、それを機に行政権限が入植地区事務所からコロナダル新行政町へ移管された。その場合ラガオ地区はブアヤン町(後のヘネラル・サントス町)へ編入されたのに対して、ポロモロックとトウピ地区はマルベル地区と一緒に becoming コロナダル町に加わった。コロナダルにはさらにバガ、スララ、ティボリ、ノララ、さらにイスラン町(現在はスルタン・タグラート州に属すが、当時はまだ同じコタバト州であった)が加わり、ここに一大コロナダル新町が誕生した。一九五〇年代初めに元町長室長のG・ガソが、コロナダルの領域をミンダナオ中央高地からティルライ山地までとしたのはこのためである。なお、コロナダル町の中心集落は、準行政町時代には南部のコロナダル村であったが、行政町に昇格した一九四七年にポブラシオンをはるか北方のマルベルに移された。

その後、町域内の人口は入植者、移住者の流入により急速な増大を続けた。その過程で、それまでの村が幾つか一緒に becoming 次々と新たに町制を敷いて独立した。一九五三

- 129 -



年には、現在のタムパカン、トウピ、ポロモロックに含まれる村むらがコロナダル町から独立してトウピ町となり、さらにバガやレイク・セブの村むらがバガ町を作った。さらに五七年にはポロモロックがトウピおよびヘネラル・サントスから独立して町制を敷き、スララ、レイク・セブの村むらがバガから独立した。こうしてコロナダル町の町域は五〇年代に大きく縮小し、六〇年代までには現在とほぼ同じ範囲になったのである(第3-b図参照)。

コロナダル町の先住民はビラアンであった。一九九〇年現在三、四八四人のビラアンがみられるが、それは町人口の三%にすぎない。代わって町内最大勢力を誇るのはヒリガイノンで、人口の六五%を占めて他を圧倒している。

五、マルベルとコロナダル

ところで、現在のコロナダル町における中心集落はマルベルである。このマルベルとは一体どういう性格の地名であろうか。コロナダル町の町開発委員会の資料によると、マルベルはmarb el、つまり「どんよりとした、真つ黒な水」という意味のビラアン語に由来する、といわれる。マウトウム火山北斜面とロハス山脈に発して北部コロナダル谷底面を北流し、ブルアン湖に注ぐマルベル川の水質を指すものと思われるが、何を意味しているかよく分からない。

い。しかし、北部コロナダル最大の河川の名前になるくらいであるから、それなりに古くから存在した重要な集落であろうと推察される。

入植計画が実施される前のコロナダル・バレーの状態を示してくれる貴重な資料の一つが一九三九年の人口センサスである。もつとも、当時のコロナダル町は、コロナダル・バレーからアラー・バレー、ティルライ山地の一部を含む大きな町域をもっていたために、同センサスの中にある村落名からコロナダル谷に立地する村落だけを取り出さなければならぬ。五万分の一地形図を使ってその作業を行うと、谷すじに存在する集落は二九で、人口は八、五五八人であったことが分かる。さらに、三九年センサスに現れるコロナダル準行政町の集落名のうち、現在のコロナダル町域内にみられる古い集落名を地形図の中から拾うと、ベルネベ(Belnebe: 一四一人)、ボロック(Bollock: 三二人)、エルーシ(Ellucy: 四三人)、ギササワ(Gisasawa: 一七九人)、カロモガ(Kalomonga: 四八人)、カロンダポック(Kalondapok: 四六九人)、マニ(Mani: 一七人)、マルベル(Marbel: 四五人)、タリック(Talik: 三二〇人)、タプラン(Taplan: 五八人)、タイマノック(Taymanok: 二二九人)、トゥカナディラス(Tukanadilas: 三四五人)の一二集落があり、人口は二、〇一六人であったことが

コロナダルの地域概念（梅原）

分かる（第4表参照）。この当時の中中部、北部コロナダルの人口は八、五五八人であるから、そのうちの四分の一が現コロナダル町の町域に居住していたことになる。これら居住者はビラアンないしマギンダナオなどの先住民であった。

最も人口の大きい集落がカロンダポックで四六九人、最小がボロックで三二人であった。マルベルは四五人であるから、中心集落であったとは考えられない。ところが、入植開始から一〇年後の一九四八年には、マルベルは早くも一万人の人口を擁して、一躍、町内きつての人口集中地区となった。マルベルが北部コロナダルの入植事業の中心地選ばれたこと、ここに入植事務所と関連施設が置かれ、入植民と関連物資移動の中継地点となったこと、さらに四七年の行政権限の入植庁から行政町への移管後は新たなコロナダル町の行政、商業中心地になったことによる。以来、コロナダルの繁栄は同時にマルベルの繁栄であった。

コロナダル町の人口は、入植計画終了後も一貫して急激な増加を続けた。それまでマルベルを含めて相対的に小さな一二の集落がみられるにすぎなかったコロナダル町域に一九六〇年には一八の大きな村落を数えるまでになり、九〇年には町内に二四ヶ村がみられるようになった。ところが、これら二四ヶ村のうち戦前から引き続き存在するのはマルベルとタプランの二集落のみで、他の一〇集落はすべ

てその名を消滅させている。先住民のビラアンが、新たに入植して土地所有権を主張するキリスト教徒フイリピン人を恐れて、土地と集落を捨ててロハス山脈あるいはケソン山脈などの周辺山地に逃げ込んだことの結果であろう。

コロナダルの町名は、実は、次に述べるコロナダル村の村名と競合するため、行政町としては使えても、特定の場所を指す地名として使用するのが難しいのではなからうか。その結果が、未だ、地図上にもまた交通機関の行き先にもコロナダルが使用されていないという状況をもたらしていると考えられる。

六、村落名としてのコロナダル

南コタバト州ポモロック町のコロナダル村の集落は、マトウトウム火山西麓緩斜面上の、海拔三二〇〜三八〇mの地点に散在する。中心集落の位置は北緯六度一四分、東経一二五度、海拔三六〇m、ハイウェイからほぼ直角に西南方向に二・七km下ったところにある（第二図参照）。前節で明らかになったように、この村は一九三九年センサス時にはコロナダル準行政町のボブラシオンであった。四七年のコロナダルの町制施行と共にボブラシオンがマルベルに移ったことにより、コロナダル村はコロナダル・バレーの中心集落の地位から外れた。以後、一時期トウピ町に属し

第4表 コロナダル町の村落別人口変化 (1939 - 90年)

村 名	1939	1948	1960	1970	1980	1990
Assumpcion	—	—	—	1,127	1,229	1,625
Avancena(Bo. 3)	—	—	1,226	1,458	2,126	2,975
Belnebe	141	89				
Bollock	32	92				
Cacub	—	—	—	—	1,486	1,482
Caloocan	—	—	—	584	1,669	2,197
Carpenter Hill	—	—	1,443	1,250	2,416	3,703
Concepcion(Bo.6)	—	—	777	1,614	1,797	2,237
Ellucy	43	1,035				
Esperanza	—	—	489	1,365	1,558	2,121
G. Santos(Bo. 1)	—	—	5,768	5,671	9,499	14,330
Guisasawa	179	523				
Kalomonga	48	58				
Kalondapok	469	620				
Mabini	—	—	1,339	1,342	1,809	2,146
Magsaysay	—	—	722	1,143	1,864	2,621
Mambucal	—	—	1,938	1,630	459	541
Mani	117	200				
Marbel	45	10,110	9,515	17,043	24,027	30,212
Morales	—	—	—	—	2,133	3,936
Namnama	—	—	626	758	1,393	2,118
New Pangasinan(Bo. 4)	—	—	1,036	1,808	2,123	2,422
Paraiso	—	—	678	912	1,963	2,847
Rotonda	—	—	661	1,061	1,682	1,773
San Isidro	—	—	506	1,206	1,761	2,539
San Jose(Bo. 5)	—	—	2,444	3,600	4,297	5,099
San Roque	—	—	681	1,122	1,981	2,678
Sta. Cruz	—	—	—	—	1,940	4,028
Sto. Nino(Bo. 2)	—	—	—	2,512	3,093	3,337
Sarabia(Bo. 8)	—	—	1,285	1,943	3,319	4,734
Talik	310	425				
Taplan(Zulueta)	58	103	1,303	3,172	4,944	7,007
Taymanok	229	245				
Tukanadilas	345	660				
合 計	2,016	14,160	32,437	54,413	80,566	108,738

[出所：フィリピン人口センサス1939、1948、1960、1970、1980、1990年より作成。]

コロナダルの地域概念（梅原）

たが、五七年のポロモロック町独立後は同町の一村である。一九四八年の人口は一、五六五人であったが、その後の入植者流入により人口は増えて、一九六〇年には三、六七七人になった。

一九九六年にここを訪れた時の印象では、この村がキリスト教徒とイスラム教徒の共存する、珍しい村落であることに気付いた。なぜなら、中心集落の東部にモスクの屋根が聳えるのを目撃したからである。人々の生活の基盤は基本的に農業にあるとみえて、ハイウェイから村に向かう道路の両側には延々とトウモロコシ畑が広がり、中心集落に着く手前辺りから、アスパラガスの栽培を目撃した。村人によると、アスパラガスは契約栽培ということであった。

コロナダル村の記述はほとんど見当たらない。コロナダル町出身の歴史家などによりごく簡単に触れられている程度である。例えば、歴史家のD・M・ノンによると、「コロナダルはかつてスルタン・スンバト⁽²⁵⁾ (Sultan Sumbato) によって統治されていた」という。その場合の支配領域は現在のポロモロックからブルアン湖の南岸に及んだといわれるから、中部および北部コロナダル地域に当たる。南部コロナダルは別の勢力であるブアヤンのラジャの支配下にあった。一九世紀の後半に北方のマギンダナオから干渉があつて谷すじの南北で緊張が高まったようであるが、この

時現在のコロナダル村に要塞が築かれ、南のブントン(Buntong)村にかけての地域が攻防の焦点となったとある。そうして、「この地域が今ではコロナダル・プロパー(Koronadal proper)として知られる」と述べている。

出典もなく、しかも一ページにも満たない短い記述であることから確かめようもないが、記述内容は大いにありえたことと考えられる。なぜなら、コロナダル村からブントン村にかけての地域は、地形的みた位置が戦略上の拠点として非常に優れていると思われるからである。現在のハイウェイはヘネラル・サントスから北西に向かってコロナダルの谷の中央部を上って行くが、かつての道は恐らく谷の西端部を流れるシルワイ(Silwai)川沿いにあったとみられる。なぜなら、シルワイ川沿いに上れば海拔三七五mのポロリン村辺りで分水界となり、そこからはマルベル川沿いにブルアン湖に向かって下っているからである。したがって、ブントン村からコロナダル村にかけての標高が三〇〇mから三五〇mに達する地点からは、サランガニ湾方面を一望に収めることができ、湾岸方面からの敵の動静を容易に把握し得る。そうした条件を備えているだけに、コロナダル村一帯が戦略上の拠点となつても不思議ではない。

また、かつて要塞も築かれていたということであるが、そういえば九六年にこの村を訪れた時の経験が思い起こさ

れる。ハイウエイから村に向かう途中に、長径が数十センチから一メートルもある大きな石が無造作に道路面に敷き詰められている箇所があって、通行中の乗合バスがそこに差し加かった際に、しばしの間激しく揺れた。道路脇には敷き詰められないで残った石が、まだたくさん転がっていた。火山山麓緩斜面の一箇所にこれだけの石が集まっていること自体が不思議である。そこに昔何かの構造物があったそれが取り壊されて出て来たものかと考えて、そのことを村人に尋ねてみたが、それらしき答えは得られなかった。一般にフィリピンの歴史はクリスチャン中心に編成されていて、異教徒のそれはほとんど知られていない場合が多い。コロナダル谷はよく、そこにキリスト教徒フィリピン人が入植する前には、ほぼ無人に近い原野であったといわれる。しかし、そう考えることは間違いである。すでに確認したように、ピラアンなどの先住民が居住していて集落があったし、谷合の平坦地では焼畑式の耕作が繰り返されていた。また、政治的には、ブルアン湖付近に拠点をもつマギンダオの人々がこの谷すじを支配し、サラングニ湾を支配するブヤンのスルタン勢力とコロナダル村辺りで対峙していたのである。となると、このコロナダル村はコロナダル・バレー地域の一つの中心である。コロナダルの語源はともかく、地域名としてのコロナダルは、実は、コ

ロナダル村の名前に由来するとの考え方も成り立ち得る。否、その方がより納得がいくのではなからうか。

むすびにかえて

以上の考察から明らかになったことは、第一に、コロナダルという地名には三つの地域概念が重なっているという点である。一定地域の地名にその地域内の意味ある場所、中心の場所や集落の名前が当てられることは多い。その意味で一つの地名に二つの地域概念が重なることは希ではない。しかし、コロナダルの場合には、地域名と町名と村名が重なっている。つまり、コロナダル谷一帯を指す地域名であり、準行政町名あるいは行政町名であり、今は一寒村にすぎないが昔はコロナダル一帯の一拠点集落であったコロナダル村の村名でもある。この点が地名としての違和感の原因になっていると考えられる。地形図上にコロナダル町の地名を入れにくいのもこうした重複によるものであろう。第二に、コロナダルは政府の開発入植地として人為的かつ急激に開発が進み、行政町の領域範囲を繰り返し変更しなければならなかった点である。このことが、地名の持つ地域概念の不安定性の一つの原因であるように思われる。第三に、マルベルは、コロナダル行政町が誕生する前か

コロナダルの地域概念(梅原)

ら、入植事業と計画地区内行政機能の中心地であったこと、また、新行政町発足後もポブラシオンとして引き続き政治経済中心地であった点である。その意味でマルベルの方が、地元住民の間では、コロナダルよりもより大きな意味をもっているように感じられる。

残された課題は二つある。一つは、コロナダル町の町名をめぐる町議会の議論を調べることである。一九四七年の新行政町制定の時点あるいはその後の段階で、町議会において新町名に関する議論があったはずである。四七年には町域がそれまでのものからさらに拡大されたわけであるから、準行政町名をそのまま踏襲することになったとしても不思議ではない。しかし、一九五〇年代のトゥピやポロモロック町がコロナダル町から独立した段階では町域が大きく縮小したのであるから、町名変更は当然話題に上ったであろうと推察される。この時の議論を詮索することが、地域住民の町名に対する意識・認識を確認することになり、コロナダルの地名の意義を深く理解することにつながると思われる。

他は、コロナダル村の村史の発掘である。特に準行政町時代の中心地であっただけに、その当時大きな足跡を残しているはずである。そのことが、コロナダルの地域概念の認識に大きく関わってくるであろう。

注記

- (1) 詳しくは、梅原弘光「開発入植と地域変化——ミンダナオ島コロナダル・バレーの事例——」(『地理科学』五四・三、一九九九年七月)を参照された。
- (2) Municipal Development Staff, *A Profile of Koronadal*, Koronadal, 1978, p. 1.
- (3) Artemio R. Gilermo and May Kyi Win, *Historical Dictionary of the Philippines*, The Scarecrow Press, Inc., Lanham, Md., & London, 1997.
- (4) G. Gazo, Koronadal (in S. F. Millan ed., *Cotabato 1952 Guidebook*, Goodwill Press, Cotabato, c. 1953) p. 205.
- (5) Karl J. Pelzer, *Pioneer Settlement in the Asiatic Tropics: Studies in Land Utilization and Agricultural Colonization in Southeastern Asia*, New York, 1945, pp. 142-143.
- (6) D. Z. Rosell, *The Koronadal Valley*, Cotabato, *Philippine Magazine*, Vol. 36, No. 12 (1939), p. 493.
- (7) ロナルド・マルベル大学図書館のVertical Fileに、ロヤルはいじりペンダナオ語源説をあげている。
- (7) Domingo M. Non, *The History of Koronadal*, 1975 (mimeographed) p. 2.
- (8) PCRDSP ed., *Bagani: Man of Dignity*, Manila, p. 31.
- (9) Gregorio Ogoy, *The B'laans' Receptivity to Non-traditional Agricultural Practices in Barangay Assumption, Koronadal, South Cotabato: A Case Study* (A Thesis presented to Asian Center, University of the Philippines, in partial fulfillment of the requirements for the degree of Master of Arts in Philippine Studies) 1985,

p. 42-66.

- (10) *Ibid.*, p. 37.
- (11) 一九九六年八月にサンロケ村で行ったインタビュー。
- (12) Pelzer, p. 143.
- (13) Roman L. Kintanar, *Climate of the Philippines*, PAGASA, Manila, 1984, p. 17.
- (14) F. L. Wernstedt and J. E. Spencer, *The Philippine Island World : A Physical, Cultural and Regional Geography*, Los Angeles, 1967, p. 548.
- (15) R. コーックによれば「コロナダル・バレーの土壌は決して肥沃ではない。むしろ瘠薄である」といふ。(Robert E. Huke, *Shadows on the Land : An Economic Geography of the Philippines*, Bookmark, Manila, 1963, p. 55) .
しかし、K・ペルツァーの研究が既刊であるにも拘わらず、その記述には何も言及しない。そのような指摘をしているために、ここではペルツァーのものを採用することにした。
- (16) J. R. Hayden, *The Philippines : A Study of National Development*, The Macmillan Company, New York, 1955, pp. 720-722.
- (17) この時期にコロナダル・バレーの西隣のアラー・バレーへの入植が開始され、マルベル地区事務所がそれも管轄した。
- (18) センサスではコロナダル準行政町、新行政町の町域で集計されているので、ここではコロナダル・バレー地域以外の人口を除外して集計をし直した。
- (19) National Statistics Office, *Provincial Profile, South Cotabato, Manila, 1990*, p. 2.
- (20) 南コタバト州は一九九六年にコタバト州から分離独立し

史苑 (第六〇巻一号)

たが、一九九二年にはさらにサランガニ州、ヘネラル・サントス市、南コタバト州の三つの地方自治体に分割された。

- (21) 準行政町は、「住民が、町政府のもとに置くにふさわしいだけの発達をしていない地方、あるいは非キリスト教徒の集落が小さすぎたり離れすぎたりして行政町のものとの村を組織化するのが適切でない地方で組織される」と規定されて、Jose V. Abueva and Rul P. DeGuzman, eds., *Handbook of Philippine Public Administration*, Manila, 1967, p. 354.
- (22) *The Southern Review*, Jan. 10-16, 1981.
- (23) Bureau of Census and Statistics, *Census of the Philippines 1960 Population and Housing, Vol. 1 Report by Province, Cotabato, Manila, 1962*, p. 19-2.
- (24) *Idem*, p. 2.
- (25) *Ibid.*, p. 7.
- (26) *Ibid.*, p. 8.

(本学教授)